

知る力と見抜く力とを身に着けて

奨励	上地 武〔うえち・たけし〕
奨励者紹介	日本キリスト教団大正めぐみ教会牧師

わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。

（フィリピの信徒への手紙 1章9―11節）

はじめに

私は、大阪市大正区にあります日本基督教団大正めぐみ教会の牧師で、上地と申します。9年ほど前に、今出川で一度お話をさせていただいたことがあります。久しぶりに今日は参りました。久しぶりですので、簡単な自己紹介をさせていただきますと、生まれも育ちも沖縄です。沖縄の大学を出て、23歳から東京で暮らし、牧師になってからは、茨城県で6年間過ごし、関東では合計15年、そして今、関西での12年目を過ごしております。年数で言えば、沖縄で過ごした年数よりもこちら、ヤマト（沖縄では本土のことをヤマトと言う）での年数が長くなりました。沖縄よりもヤマト生活が長くなったという逆転現象になりましたが、そうであっても、私の沖縄に対する気持ちは、ヤマトで過ごす年月が長くなればなるほど、強くなる思いでもあります。そのような私が大阪で牧師として住んでいるのですが、関西には（特に同志社関係では）、たくさんの優秀な牧師がおられることはご承知のとおりです。そうしたなかで、同志社出身でもない私に奨励をする機会が与えられましたので、せっかくですので、今日は私がこだわっている沖縄に関連づけて、お話ししたいと思います。

今日は何の日

さて、ここから具体的な話に入っていきます。今日は、10月10日です。何の日でしょうか。10月10日と言えば、私たちの世代にとっては、体育の日でした。今は祝祭日の法改正によりハッピーマンデーとなって、10月の第二月曜日が体育の日となっていますが、以前は、10月10日＝体育の日。それは、東京オリンピックが1964年10月10日の開会式によって開幕したことを記念して体育の日に制定されたのです。ところが沖縄では、10月10日は体育の日よりも、別の日の意味があります。1964年の体育の日から20年前のことです。それは、太平洋戦争の真っ只中のことです。1944年10月10日に、沖縄の那覇市は、米軍の大空襲によって市街地の大半が焼失し、多くの市民が死傷するなど大きな被害を受けます。沖縄戦は、1945年4月1日に始まったなどと書かれた本もありますが、その3日前の3月28日には、慶良間諸島では大規模な「集団自決」（＝強制集団死）があり、前年の10月10日には、那覇空襲（10・10空襲）があり、その2カ月前の8月22日には、学童疎開船「対馬丸」が撃沈され、1500人近くの民間人が亡くなっています。ですから、沖縄戦がいつから始まったかというのは、どの事件を起点にするかによって違いが出てくるのですが、いずれにしても、東京オリンピックのたった20年前には沖縄で大空襲があったということです。皆さん、想像できますか。たとえば、今年はロンドンオリンピックが開催され、日本も熱狂的に盛り上がりましたが、それを、仮に1964年10月10日の今日、オリンピックが京都で開催されたとしましょう。ところが、その20年前の10月10日の沖縄では大空襲が起きていた。戦争が終わってたった20年間で、京都は発展し、オリンピックも開催できた。一方、大空襲のあった沖縄は、アメリカの占領下で、アメリカのやりたい放題だったのです。

沖縄は1972年に「日本復帰」（施政権が日本に返還）されますが、皆さんが「京都」オリンピックで興奮している時、沖縄は蚊帳の外だった、ということです。ましてや、京都はたくさんの文化財があり日本の歴史そのものだから、アメリカも空襲・空爆は避け、たくさんの建物や自然が残った、と聞いています。一方、沖縄は徹底的に、まさに、鉄の暴風と呼ばれるほどにアメリカに破壊されたのです。

10月10日が、ヤマトにとっては東京オリンピックの記念日だとしても、沖縄は「10・10空襲」を心に刻む日なのです。ですから、平和を祈り、その日を忘れないようにと、琉球王国時代からの神事である、400年の歴史をもつ那覇の大綱挽きが行われています。全長200m、直径1m56cm、総重量43トンの大綱で、ギネスブックに認定された世界一の大綱挽きです。その大綱挽きも、戦後「10・10」に開催だったのが、祝祭日の法改正によるハッピーマンデーによって、10月第二日曜日開催に固定されてしまい、本来の10月10日（10・10空襲）を覚える日から遠ざけられました。10月10日に何があったか、という歴史の真実が見えなくされていくようで残念です。現実の社会では、平和を願い、祈りながらも、それを実現させるのは厳しいということです。

沖縄は今、オスプレイという米軍の垂直離着陸機が配備されました。市街地のど真ん中に位置し、世界一危険な基地と呼ばれる米軍普天間基地に、墜落事故が多発している一番危険なオスプレイが、この10月1日から配備されたのです。沖縄では、去る9月9日には、オスプレイ配備に反対する県民大会が開かれ10万3千人が集まりました。沖縄県議会をはじめ沖縄の全市町村41の議会が配備反対決議をしていますが、日本政府は、この沖縄配備を良しとしました。米軍は、3・11の東日本大震災の後「トモダチ作戦」と称して、人命救助や復興支援に協力したとヤマトでは讃えられましたが、沖縄では「トモダチ」ではない、ということです。「トモダチ」なら、相手がイヤだと言うこと、本当に絶対にイヤだと断っていることは、しないでしょ。

小さな存在 46対1

さて、日本には47の都道府県があります。沖縄はそのうちの一つです。歴史的なことをここで詳しくお話す時間はありませんので割愛しますが、小さな沖縄1に対して、大きなヤマトの都道府県が46あります。1対46の構図です。それを頭におきながら、聖書の話を読み出してみましょう。

聖書には、99匹と1匹の羊という有名なたとえ話があります。マタイによる福音書では、「迷い出た羊」のたとえ、として紹介されています。「ある人が羊を百匹持っている、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう」（マタイによる福音書18章12―13節）。

ルカによる福音書では、「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」（ルカによる福音書15章4―7節）と記されています。大雑把に言えば、両方のたとえとも、九十九匹を残して、一匹を捜すということです。一匹という、小さな者、小さな存在を大切にしている行動を記しています。ところが、このたとえで注目するのが、マタイによる福音書では、一匹は「迷い出た羊」であり、ルカによる福音書では、「見失った羊」となっています。

私は、この箇所を沖縄の視点で考えてしまいます。47都道府県という集団からはずれている、一匹の小さな沖縄です。その沖縄は、マタイによる福音書のように迷い出たのか。そうではない。では、ルカによる福音書のように見失ったのか。では誰が見失ったのか。いや、たとえそれが見失われた存在だったとしても、沖縄は、悔い改める必要のある罪人なのか。沖縄以外の46都道府県は、悔い改める必要のない正しい人としての存在なのか、と考えるとします。そうすると、このテキスト（九十九匹と一匹の羊のたとえ）は、そのまゝ、沖縄の事柄にあてはめることはできないだろうけれども、小さな一匹を捜す行為、一匹を大事にする行為、小さな者を軽んじない行為、粗末に扱わない行為の姿を教えてくれます。

ところが、今の日本政府や大多数の者は、まるで自分たちが正義であるかのようです。多数決が民主主義のものとして、暴力化していくのが目に映ります。日本国民の1％に当たる沖縄の人びとが、オスプレイの配備はイヤだ、と言っても、99%の他都道府県が無関心で、「それで別に良いじゃないの」と黙認すれば、イヤなものを押しつけられるのが私たちの社会です。

聖書をどう読むか

今日の聖書は、フィリピの信徒への手紙1章9―11節です。使徒パウロが、獄中で書いた手紙と言われている箇所です。今回のお話を伺ったとき、チャペル・アワーの秋学期のテーマは、「互いに重荷を担いなさい」とのことでした。「互いに重荷を担いなさい」を、口先だけでなく本当に真剣に問うとき、私は今日の聖書、獄中書簡のパウロの姿を思い浮かべました。

パウロは、監禁されています。なぜでしょうか。ひと言で言えば、権力を持つ者、体制側にとっては目障りで邪魔な存在だったからです。だから捕まえられ、牢屋に入れられた。私の友人牧師も、昨年4月に不当逮捕されて、111日間も大阪拘置所に入れられました。今、大阪高裁で裁判中ではありますが、事件の発端は、大阪市の西成区で釜ヶ崎の労働者と共に、「自分たちにも選挙をさせろ。投票させろ」と「投票呼びかけ行動」をしたことが、威力業務妨害として起訴されたのです。同じ事件では、この同志社の卒業生である先輩も逮捕起訴され、高裁で係争中、先月亡くなりました。逮捕以前からガンと診断され、拘置所に勾留中も治療を要すことから保釈を申請しましたが、裁判所からは何の理由も告げられず却下され、111日間というこの不当勾留期間が彼女の命を縮めさせたのは事実です。これが、私たちの社会の実態です。小さい者が叫んでも、少数者の声は、こうしたことに無関心な多数者の耳には届かないのです。

パウロの時代もまたそうでした。しかしパウロはへこたれませんでした。失望しませんでした。これが、獄中書簡としてのパウロの手紙でもあります。今日は、9節から11節と短く読みましたが、3節から読みますと、パウロは獄中でも、「神に感謝し、あなたがた一同のために祈る」と記しています。なぜなら、「それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです」（フィリピの信徒への手紙1章5節）とあります。この福音にあずかる、ということはどういうことかと考えますが、私は、同志社で学ぶ、あるいは、働いておられる皆さんのことでもあると思います。同志社の皆さんは、キリスト教を土台としたこの環境のなかで、「あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです」というパウロの言葉そのものを過ごしています。福音にあずかる者たちは、イエスの愛の心が与えられると言います。ここに記されている「愛の心」も「スプラクナ」というギリシア語を訳したのですが、この「スプラクナ」を突き詰めれば、「内臓」（はらわた）を指し、「憐れみ」「熱愛」の意味をもちます。口先だけの愛ではなく、自分も痛む熱愛です。だからこそ、パウロはまた次のように祈るのです。

「わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように」（9—10節）。パウロがまず祈り求めたのは、自分の内臓も痛む憐れみ、熱愛の「愛がますます豊かになる」ことです。これは、「知る力」と「見抜く力」とを身につけてできるのです。この「知る力」「見抜く力」とは、言い換えれば「認識」および「洞察する力」です。10節にあるように、「本当に重要なことを見分けられるように」と、「認識」し、「洞察する力」を身につけることが「愛する」ことにつながるのです。

互いに重荷を 担い合うために

冒頭、私は「今日は何の日か」ということから、沖縄にとつての10月10日の意味を考えました。今、日本には竹島問題や尖閣諸島の問題、原発問題など、私たちの生活を脅かす問題が山積しています。これらは、一朝一夕で解決できるようなものではありません。いろんな歴史の積み重ねの上に、これらの問題があるのです。私たちの周りには、知らないこと、気がつかなかったことがたくさんあります。そうしたことに気づいたときに、その歴史を知り、偽善を見抜く力を身に着ければ、本当に重要なことを見分けられるでしょう。それが、「互いに重荷を担い合う」ことにつながるのではないのでしょうか。この社会の現実から、真実の姿を「知る力と見抜く力とを身に着けて」、私たちの「愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように」と心から祈って、本日の奨励を終わります。

2012年10月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録